

1. 研究目的

知られてはいるが、深く理解されているとは言い難いアフォードダンス理論を論理的に理解すると共に、それを社会にとってより有用に扱うことができないかについて研究を行うこととした。

2. 調査と分析

[調査]

D.A.ノーマン著の『誰のためのデザイン』と『複雑さと共に暮らす』という2冊の本と複数の研究論文を読解した。その結果次のことがわかった。

- ・アフォードダンスには複数の側面での意味や解釈がある。
- ・シグニファイアという用語の導入とアフォードダンスとの区別について理解する必要がある。
- ・ノーマンが掲げるアフォードダンス理論の形態は、知覚可能な部分と知覚不可能な部分とで大きく二分化されている。(図1)

上記内容の詳細は別紙報告書にまとめた。

[分析]

ノーマンの考えを踏まえた上で、私は二分割されたアフォードダンス理論の形態を、現実社会と照らし合わせ三分割にして捉える必要があるのではないかと考えた。それは、知覚可能なアフォードダンスの部分とさらに二つの領域とするものだ。一つは多くのヒトが自然に知覚可能なアフォードダンスであり、もう一つは、訓練をうけた専門家でなければ気づきにくい領域とする捉え方である。(図2)



図1 アフォードダンス理論_D.A.ノーマン 図2 アフォードダンス理論_本研究による提案

3. コンセプトの立案

ものづくりに携わるヒトすべてにとって、アフォードダンスの発見は必要なことだと私は考える。故に、図2で表記した専門家には気づけない部分のアフォードダンスをより多くのヒトが発見し、与える力を共有することで、社会全体としてのモノ作りやクリエイティブ産業等のレベルが上がり、社会全体とし

てのものづくり力を高めることが可能ではないだろうか。

4. デザイン展開

アフォードダンス理論を学んでいないヒトたちにも親しみやすいかたちでモノからのアフォード(可能性)に注目してもらうための、気づきのきっかけとなり得る方法について考えた。

そこで、日常の中で現在活用されているアフォードを、ビジュアルを中心に紹介したブックの試作品を製作して、読んだヒトに対して得られた効果の検証実験を行った。

5. 完成図



ブックの主なつくり

6. 結論

デザインを学んでいない一般の方々を対象にブックについてのアンケートを実施した結果、考え方に興味を持ったり、主にクリエイティブな場面で利用できそうだという意見が得られた。今回の研究の目的は概ね達成できたと考える。

文献

- [1] James Jerome Gibson, 『生態学的視覚論—ヒトの知覚世界を探る』サイエンス社,1985年
- [2] Donald Arthur Norman, 『誰のためのデザイン』新曜社,1990年
- [3] Donald Arthur Norman, 『複雑さと共に暮らす』新曜社,2011年